

きつと

早稲田大学教授

森山卓郎 もりやま たくろう

「走れメロス」に、「その身代わりを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰って来い。遅れたら、その身代わりを、きつと殺すぞ。(略)」という、王の会話文の一節がある。実は、この文の解釈には、微妙なゆれがある。ここでの「きつと」の解釈に違いがあるのだ。前年にこの教材を学習した中学校三年生二七人に、「ここでの「きつと」に近い用法のものを含む文を、次の三つの例文から選んでもらったことがある。あなたならどれを選びますか？」(1)のしられた彼は、きつとになってしまった。

(2)きつと明日は雨だ。
(3)きつとやり遂げてみせたい。

まあ(1)は明らかに違う。(2)は微妙。ふつうに解釈すると「たぶん」と同じ推量の意味、すなわち「雨でない」可能性が残されるという意味だ。五二％がこれを選んだ。その理由について書いてもらおうと、「まだわからないから

これから何が起きるかを予想しているから」のような記述が多かった。

しかしどうだろう。「きつと殺すぞ」は「たぶん」のような予想や推量の意味だろうか。これは王がセリヌンティウスを身代わりの人質にする場面。メロスが時間通りに帰ってこない場合、「必ず」セリヌンティウスを殺すのではないか。「たぶん殺すぞ。でも、助けるかも」という意味ではないはずだ。

そうすると、「ここでの意味は、」間違はなく、必ず、殺すぞ」という、(3)「きつとやり遂げてみせたい」の方ではないだろうか。事態実現への強い思いを表す用法だ。しかし、これを選んだのは四七％だった。

小学校の国語教材にも、同じような「きつと」がある。(略)自分で自分を弱虫だなんて思うな。人間、やさしささえあれば、やらなきゃならぬことは、きつとやるもんだ。それを見て、

他人がびくくらするわけよ。」(三年下巻「壬子壬子の木」という会話だ。「おくびょう豆太」が、具合が悪くなったじさまのために、夜中に、ふもとまで医者様を呼びに行くことができたことをふまえている。この「きつと」も「たぶん」ではない。「やらないこともあり得る」という推量だと、この文脈には合わない。「やらなきゃならぬことは、必ずしつかりやる」のではねえか。「きつと」の意味用法には広がりがある。日常生活では、「たぶん」の意味の方をよく使うように思う。しかし、「間違はなく、必ず」の意味もある。どちらの意味かは読みにも関わる。

だから、「きつと」のような言葉に立ち止まることも時には必要だ。「言葉にこだわる詳細な読み取りなんてだめだ」なんて言われたら、ぼくはきつととなって、「きつとそれは違います。言葉を大切に読み取りもきつと重要です」と言いつつもりだ、きつと。